

九郎太郎殿御返事

弘安元年十一月一日 五七歳

これにつけても、故上野殿出の事こそをもひいでられ候へ。

いも一駄・くり・やきごめ・はじかみ給手ひ候ひぬ。さてはふかき山にはいもつくる人もなし。くりもならず、はじかみもを栗ひず。ましてやきごめみへ候はず。たといくりなりたりとも、さるの猿こすべからず。いえのいもはつくる人なし。たといつくりたりとも人にくみてたび候はず。いかにしてか、か高るたかき山へはきたり候べき。

それ山を見み候へばたかきよりしだいにしもえくだれり。うみをみ候へばあさきよりし次だひにふかし。代をみ候へば三十年・二十年・十年・五年・四・三・二・一と次第にを第とるへたり。人の心もかくのごとし。これはよ世のすへになり候へば、山にはまがれる木きのみとゞまり、のには野ひき低くさのみを草ひたり。よにはかしこき人はすくなく、はかなきものは多をほし。牛馬の父ちとをとしらず、兎羊の母をわきまえざるがごとし。

仏御入滅ありては二千二百二十余年なり。代すへになりて智人次第にかくれて、山のくだれるごとく、くさの低ひきににたり。念仏を申し、かいを戒たもち持なんどする人は多をけけれども、法華経をた持のむ人はすくなし。星は多けれども大海をてらさず。草は多けれども大内の柱とはならず。念仏は多けれども仏と成る道にはあらず。戒は持てども浄土へ参まひる種とは成らず。但南無妙法蓮華経の七字のみこそ仏になる種には候へ。此を申せば人は妬そねみて用ひざりしを、故上野殿信じ給ひしによりて仏に成らせ給ひぬ。各々は其の末にて此の御志をとげ給ふか。竜馬につきぬるだには千里をとぶ。松にか馬れるつたは千尋をよ攀ぶと申すは是か。各々主の御心なり。つちの餅もちをを仏に供養せし人は王となりき。法華経は仏にまさらせ給ふ法なれば、供養せさせ給ひて、いかでか今生にも利生にあづかり、後生にも仏にならせ給はざるべき。その上み身ひんに貧にして下げに人んなし。山河煩わづらひあり。たとひ心ざしありともあらはしがたきに、いま色いろをあらわさせ給ふに煩しりぬ、を守ぼろげならぬ事なり。さだめて法華経の十羅刹ま守ぼらせ給ひぬらんとたの頼もしくこそ候へ。事つくしがたし。恐々謹言。

十一月一日

日 蓮 花 押

九郎太郎殿御返事